

少子化時代の教育戦略

ベネッセ文教総研 高田正規 TAKATA Masanori

問題の所在

学校教育に対する少子化の影響として顕在化しているのは、自立できない子ども達が急速に増え自己コントロールができにくいためアダルト世代から見ると「ワガママベクトル」と思える行動をとり、「学び」から離脱するケースも見られている事である。

わが国の社会に対する閉塞感を背景に、大学生も含めて未来に対する意志決定ができにくい——言いかえると、進学や就職に積極的な意義を見つけにくい状況の中で自己実現を考えなくてはならないという矛盾の中で子ども達は生きている。

このような実態変化に対応して、学校教育を再構築するためには初等中等教育と高等教育の接続をどのように設計し、実践に移すかを早急に策定する事が求められていると言えよう。

1. 中・高校生の将来展望

未来に対する意志決定ができにくい状況のもとで子ども達は「近未来における自分」をどう描いているのかについて、(1)将来の目標 (2)生き方の選択 (3)つきたい仕事などの観点からその実態を報告し、高校・大学生の進学動機について自我同一性（アイデンティティ・パターン／IPS 尺度）の確立度による類型間の格差に注目しながら、顧客にとっての大学教育とは何かを考察してみたい。

2. 大学教育への期待と満足度

まず、大学人と企業人の間に存在する役割期待についての認識のギャップを考え、大学改革の方向性を人材育成にかかわる調査結果に基づいて学部系統と難易度別に検討してみると、前回（'98年）と比較してかなり明確な分化が起りつつあり、大学改革のための具体的施策の力点が明確になりつつあるようだ。

その中で、重要性が高いと認識されているにもかかわらず取り組みのレベルと比較してギャップが大きいのが「授業方法の改善（ファカルティ・ディベロップメント／FD）」と「進路支援（キャリア）教育の充実」である事が検証できた。

'93年以降、断続的に学生による大学満足度調査を実施してきたが、国立大15と私立大11校を抽出して(1)期待と満足度を5領域ごとに分析してみると大学間格差（特色）を読みとる事ができる。(2)総合満足度への寄与率の高い5つの因子を大学ごとに分析すると、満足度にはか

なり大きなバラツキが認められ、個々の大学が当面している課題は明らかに異なっており、具体的な施策は相対評価を加える事によって策定しやすくなる事が検証された。

文部科学省が資金面で 30 大学の育成に重点を移すことを公表したが、科学研究費等の配分率から考えてその候補となる事が予想される国立 15 大学について学生の進学動機／志望度／満足度などの観点から相対比較してみると大学ごとの特色はかなり鮮明となっているようだ。

3. 授業満足度と高大接続

さきに指摘した IPS 尺度による分析を併用しながら、授業満足度について分析してみると大学教育改革の柱が「授業改善＝FD」である事が検証できる。

学生の「学び」に対する期待（意欲）は高いが、「学びへの行動」に移しにくい状況を IPS 尺度と自己概念の肯定度（SCS）尺度によって検証してみると、学びの目標が描け自己肯定できるか否かによって学びからの脱落率に変化が認められた。この率は、大学教育への満足度の高低とも相関しており、授業満足度を高めるカギは学生の意図的学習を如何に定着させるのかという教育課題に帰結する。

教育領域別に見ると、専門教育に対する満足度は高いが、語学教育も含めて教養教育の満足度は一般に低いレベルにとどまっている。

複合的視野の育成が語学や情報などの学習スキルの育成と共に教養教育の柱だと考えられているが、学生にとってリアリティのある教養教育は「生き方」にかかわるテーマを学問体系の中でどう取り扱うかにかかっており、2003 年から高校において実践される「総合的な学習の時間」でまかれた「種子」を、どう育てて行くのかという考え方も一つの方法であろう。

文部省（現、文部科学省）はすでに「職業教育及び進路指導に関する基礎的研究」（1998 年）において、キャリア教育構想化モデルを提示しているが、それはグローバル社会の中での人材育成についての指針となっており、大学における教養教育が初等中等教育での「自ら学び、自ら考え、共により良く生きる力の育成」と連動し、課題探求・解決能力の養成との相乗効果を期待するものであり、多くの教育者の支持をうける方策だといえよう。

グローバル社会は、ヒト・モノ・カネと情報が地球規模で交流し国家間の相互依存と協調がより強まる社会である。このような時代をより良く生きるためには、ひとり一人の子ども達がアイデンティティを確立させ、多様性・異質性への理解と共感を深めることが欠かせない。教養教育の存在価値は「自立できにくい子ども達」に人生の目標を描かせ、自己実現にむけて努力することに価値を発見させるところにある。中等教育で播かれた「種子」が高等教育で育てられ開花するようであれば、学生の未来に対する意志決定と「生き方」についての主体的な選択力と、自己実現にむけての行動力が育ち「人間的成長」が実感できるのではないだろうか。